



ヘッドマウントディスプレイをつけてVR体験をする様子。首を動かすと視点も変わるため、目の前の映像が本物のように感じられる。

バーチャルリアリティー(VR)で認知症を疑似体験 認知症の理解から 温かなまなざしが生まれる

株式会社シルバーウッド
代表取締役 下河原忠道



認知症の人の気持ちは、認知症にならないとわからないのが世間一般の常識でしょう。現在、バーチャルリアリティー(VR)という最新の技術を用いて認知症の理解を促す取り組みが進んでいます。その様子を紹介します。

認知症は特別ではない 私たちの仲間だ

認知症を理解してもらうためには、社会的心理環境が重要な要因になると、サービスピック高年齢者向け住宅「銀木屋」を開設している下河原忠道さんは話します。「社会的心理環境とは、要するに人々のまなざしです。たとえば、認知症の人が街中を歩いていたら世間的には徘徊と見

なされますが、実は散歩なのかもしれません。認知症の人を温かく見守る寛容なまなざしがあれば、認知症の人は社会の一員として生きていけるのでは」と下河原さんは提起します。

認知症には中核症状とBPSD(行動心理症状)の2つの症状があります。中核症状とは、脳の神経細胞が壊れることにより直接起こる症状で、記憶障害や判断力の障害、見当識障害などがあり、認知症になれば誰にでも現れます。

一方、BPSDは、暴言、暴力、妄想、徘徊などの症状を指し、人それぞれ現れ方が異なります。しかし、BPSDの症状の

では、認知症の疑似体験とはどういう感覚なのでしょう？
まず、体験者はヘッドマウントディスプレイと呼ばれるサングラスのような装置とヘッドフォンを身に付けます。これを付けると、目の前に映像が流れますが、通常のテレビ画面など

と異なるのは、首の向きなどを変えるとその動きに合わせて映像の向きも変化すること。電車の座席に座っている画像が流れている場合、右に首を向けると右に座っている人が目に入り、上を向くとつり革が、さらに後ろには車窓から流れゆく風景が見える、という風に映像のなか

に自分が入りこんだように感じられるわけです。

同プロジェクトで流れる映像のストーリーの主人公は認知症の高齢女性で、その女性として座席に座っているところから、映像は始まります。女性は横浜に向かおうとしているのですが、どこで乗り換えるのかわからなくなり、高齢女性の不安げなつぶやきが常に聞こえてきます。車内にはたたくさんの乗客が

ほうが目立つため、下河原さんは世間の人たちがBPSDにだけ注目し、本質的な障害である中核症状に目を向けてこなかったことが、認知症理解の大きな妨げや差別につながっているのではと話します。

知症の人の気持ちはわからない、というのが誰もが思うところでしょう。たとえば、風邪をひいている人に対して、私たちは「つらいですね」と共感を込めてねぎらうことができますが、それは体験したことがあるからです。しかし、認知症はそうはいきません。

「BPSDだけに注目するから、認知症はなんだかわからないという認識になってしまうので困っているのか、辛い思いをしているのかを理解するには、中核症状を理解する必要があります」

認知症を疑似体験し 理解を喚起する

そこで、下河原さんは認知症を疑似体験できる「VR認知症プロジェクト」を立ち上げました。これは、VRによって、認知症の中核症状を体験できるというものです。VR認知症プロジェクトにおける映像製作はすべてシルバーウッド社で行っており、希望に応じて体験会が開催される予定です。

感じづかぬ。まるでこの世界にたった一人で放り出されたような孤立感や心細さを感じられます。そして、電車がとある駅に着き、大勢の人たちが降りるのを見て、電車から降りますが、どこに立っているのかわからず、ホームにいた駅員もおどろきな対応しかしてくれませんが、立ち尽くしていると、後ろから「どうしましたか」と若い女性が声をかけてくれ、主人公がほっとする、というところで映像は終わります。

「最後の女性の声かけで、体験者の方もほっとするようになります。これを体験すると、認知症に対するイメージが大きく変わった、私たちと地続きの人なんだということがわかったと感想が多く聞かれます。社会的心理環境を変えるのは容易なことではありませんが、一般の人が「認知症の人は私たちの仲間」といったまなざしをもつようになると、認知症の人が生きやすくなる社会になります」と下河原さんは話します。

★考えてみよう!★

認知症当事者の方の気持ちは、なってみないとわからない、という方が多いと思います。しかし、顔を見ても名前が思い浮かばない、本当に目的地に着く電車に乗っているのか急に不安になる、といったことなら誰もが経験していることでしょう。認知症はそうした経験が頻繁に起こるようなものととらえてもいいのでは。認知症という言葉に反応し過ぎて極度に恐れるのではなく、日常生活の延長線上にある症状であり、認知症の人たちは自分たちと大きな違いがある人ではないという視点も大切になるでしょう。また、VR認知症プロジェクトのように疑似体験を通じて認知症を理解する動きも各地で出てきています。恐れるだけでなく、自分から知ろうとする意識をもつことも大切でしょう。